

阿波公方列伝 (4)

3代阿波公方

足利義種

4代阿波公方

足利義次

(平島又八郎)

文化振興課 森脇 佳代子

今回は3代公方義種と4代公方義次についてお話したいと思います。

義種、義次が生きた時代は中世から近世への大きな転換期でした。関ヶ原の戦い、江戸幕府の成立、キリシタン禁教令、大坂の陣、めまぐるしく変わる世の中で阿波公方家もさまざまな変化を受け入れざるをえませんでした。

そんな中、3代阿波公方義種が、長男の義次のために書いたものが『平島記』(寛永六年、1629)です。

『平島記』には、阿波公方家Ⅱ平島公方家が阿波に住むようになった経緯、平島公方家と関係の深い細川家・三好家のこと、戦国時代から藩政期はじめ頃の平島公方家の出来事を中心に義種が子孫に伝えたかった一族の歴史が記されています。また、13歳の義次をはじめ藩主に紹介した際、平島姓を与えられたエピソード(以降、9代義根の阿波国退去まで、

歴代阿波公方は「足利」ではなく「平島」と名乗るようになります。大坂冬の陣の際、豊臣方から公方家に参陣要請があり、それを徳島城に相談に持つことによって藩主に感心された話、蜂須賀家政から米や服、馬、鷹、平島館修理のための資材等たくさん贈り物をもたらしたことなど、義種自身が体験したこと書かれています。

徳島藩を制度化、整備していく中で、蜂須賀家政は阿波公方家が力を持つことを恐れていました。「將軍家の子孫に大禄を与えれば、乱を生じるものになる」という家政の言葉が残っています。公方家の経済力を削ぎ、改姓させることで権威を削ぎながらも、困っている公方家には都度家政が援助をするという絶妙な対応をとっていました。この時期は、藩側公方家側ともにお互い敬意と気配りをもって交流していたようです。

またこの江戸時代の初め頃は、キ

リスト教の弾圧が厳しくなる時期でもありました。実は3代公方義種の妻であり4代公方義次の母でもある祐賀は一期キリシタンでした。祐賀の兄ディオゴ結城は畿内最後まで潜伏し活動を続けた宣教師で、祐賀と祐賀の娘ら家族数人、平島公方家の家臣数人はこのディオゴ結城から洗礼を受けていました。そうした経緯からキリシタン詮議を受けることになり、平島一門は長崎奉行(吉利支丹奉行)のディオゴ探索に巻き込まれていきます。戦国・安土・桃山時代にかけて20万人とも、70万人ともいわれたキリスト教徒は、江戸幕府の徹底的な弾圧により表向きは姿を消します。ディオゴ結城も20年にわたる潜伏生活の末、最終的には阿波と讃岐の国境で捕らえられ、穴吊りの刑を受け殉教しました。



義種・義次のお墓があったといわれている館跡の小山

【FILM】

令和6年は辰年ですね。実は、阿波公方には龍(辰)にまつわる話がたくさんあります。

6代阿波公方の名前は義「辰」。「よしとぎ」と読みます。

9代阿波公方、義根の号(ペンネーム)は「棲龍」、義根が刊行した漢詩集の名前は『棲龍閣詩集』です。阿南市には太「龍」寺もありますね。義根は『棲龍閣詩集』の中で太龍寺山のことを「龍山」とよんでいます。令和6年、龍が天に昇るような素晴らしい一年になることを願っています。



棲龍閣詩集

問い合わせ

文化振興課 ☎22-1798